

第13章『大いなる遺産』

種子=ピップは牢を破って外で花を咲かせるか

鵜飼 信光



「食べ物何か知っとるな？」(第1章、F・A・フレイザーの挿絵、ハウスホールド版)
ピップは墓碑の両親の名を読んでいると、マグウィッチが現れ暴力的な関係を結ばされる。

『大いなる遺産』の主人公ピップの姉ミセス・ジョーの名は、作品中で一度だけ、ピップがビディーに求婚するためにジョーの家を訪れる日の朝、青豚亭でパンブルチュックの口を通して

「ジョージアナ・マリア」(第五八章、マリア「Mria」は母音を縮めて言われる)であることが示される。作品の冒頭でピップが墓碑銘から読み取るように、ジョージアナは彼の母の名と同じであり、ピップの正しく発音された場合のフィリップという名も彼の父の名と同じである。他の五人の兄たちが死んでしまっている中で、親の名を受け継いだ姉とピップ自身だけが生きながらえていることになる。列挙される兄たちアレグザンダー、バーソロミュー、エイブラハム、トバイアス、ロジャーの最初の一字(トバイアスのみ二字)を拾うと「相続地不法占有者(abator)」という法律用語になるが、それらの死んだ兄たちの名は、ピップがたまたま親の名を受け継いでいるために地上での生存という財産を相続していることを責めているかのようである¹。あるいは、ピップとミセス・ジョーの名は、二人の両親がピップと姉の関係と同じように、一方が他方に力を握られ虐げられるものであったことを示唆しているとも、または逆に、夫が妻を虐げる様子を目の当たりにしていた姉が、母の代理的復讐として、父の名を受け継ぐ弟を虐げていることを示唆しているとも考えられる²。両親の仲がどうであったかピップは何も知らないため、作品中でそれが語られることもないが、彼の姉は両親の姿によってすり込まれた暴力を弟に向けて再現

しているのかもしれない、彼と姉の名はその両親もまたジャガーズの言うようなどちらかが他方を制圧している関係であったことの可能性を示唆している。

このように、ピップと姉と両親の名は、姉による日常的な暴力にさらされるピップの立場が、両親のどちらかの立場の反復であるかもしれないことを暗示していて、ピップが彼の語りの中で姉を決して「ジョージアナ」と呼ばないのも暴力的な姉を母の名で呼びたくないという彼の心理の表れなのだと推測させる。一方、ピップの姉のミドルネーム「マリア」に注目すると、ピップと暴力の関係の別の面が浮かび上がる。それは、姉の夫ジョーの省略しない名がジョーゼフであるため、その夫婦が聖母マリアと夫ヨセフと同名で、ピップがキリストと重ね合わされていることによる。キリストが処女懐胎で誕生し、ヨセフとマリアの「実子」でないように、ピップもまた姉夫婦に養われながら実子ではないこと、ピップがマグウィッチに命じられた盗みを実行し、いわば新たな生へと踏み出すのが、キリストの誕生を記念するクリスマスの日とされていることも、その重ね合わせを補強しているだろう。しかし、その重ね合わせは逆に、ピップのキリストとの相違を浮かび上がらせもする。「マタイ伝」五章三九節の「人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ」という言葉が示すようにキリストは非暴力を説き、復讐を戒めているが、ピップは暴力の被害者でありつつ、暴力を加える者でもあるからである。マリアがヨセフを虐げている姉夫婦は、聖母とその夫の相関物としてはあまりにグロテスクだが、

そうした対比こそが重ね合わせの狙いであり、ピップとキリストの相違が強調される。キリストとのいくつかの面での類似が、逆に、類似しない側面を浮き彫りにするのである。本稿ではピップが暴力の受け手でありつつ、キリストと違い、どのように暴力の加え手でもあるのか、暴力の連鎖に深くからめ取られているように見えるピップにそこからの解放の希望はあるのかの問題を考えて行くことにしたい。

第一節 穏やかどころではない人々

ピップがなりたいたと切望する「ジェントルマン」は、オックスフォード英語辞典によればフランス語系の言葉で「同族の名家の出の人」という意味で十三世紀から使われ始めた。「ジェントル」の「穏やかな」という意味は十六世紀に生じたものである。そのように語源的には「名家の出の人」でありながらも、「ジェントルマン」は近代の感覚では「穏やかな人、優しい人」という、暴力の対極にあるものを連想させる言葉でもある。

しかし、ピップは「ジェントルマン」になろうと切望するものの、彼は穏やかどころではない何人もの凶暴な男女と関わりながら生きていかなければならない。作品のはじめ近くだけでも、教会の墓地に急に現れたマグウィッチのピップへの手荒な扱い（本稿の扉絵参照）や、「言うことを聞かなければ食べられてしまうぞ」というカニバリズム（図版①）を含む脅し、ミセス・ジョーの日常的な暴力や、クリスマスの食事に招かれた



図版①「それは大きな、私の、結婚式のケーキなのだよ！」（第11章、ジョン・マクレナンの挿絵、ハーバー・アンド・ブラザーズ版）

ミス・ハヴィッシュはピップに、彼女が死んだ時、大きなテーブルに横たえられた彼女の亡骸を遺族がむさぼることになる、とカニバリズムのイメージを語る。

大人たちのピップに対する言語的な暴力など、暴力の例は数多い。ピップが受ける暴力だけでなく、ピップが加える暴力の例もある。パンブルチュックにタール入りのブランドーを飲ませて日頃からひどい扱いをする彼への復讐を果たしてしまうエピソード、挑発への復讐として設定された格闘でハーバートを打ち負かしてしまうエピソードは、ピップの側の暴力性や復讐の例として注目される。身体的な暴力に限っても、マグウィッチとコンピソンの格闘の他に、エステラの平手打ち、オーリックのミセス・ジョー殴打とピップ殺害の企てなど、『大いなる遺産』は暴力の要素に満ちている。暴力を精神的な面から捉えれば、ピップのエステラへの非理性的な、自分を苦しめるだけのような思慕にも暴力との類似性がある。

エステラへの非理性的な思慕は、ピップの自分自身への暴力という側面があり、自己への暴力と見えるほど、ピップが自分を身を罪悪視する傾向と類似している。死んでくれた方がよっぽどうれしいという趣旨の姉の言葉、性悪で恩知らずな子供であり、徒弟になれば主人や叔父を殺すような犯罪者に必ずなるというパンブルチュックとウォプスルの言葉が、ピップの罪悪感と関わっているが、ピップには自分自身の人生の物語を決定する作者としての能力が奇妙に欠如していて、周囲の大人が押しつける性悪で恩知らずの子供、怠慢な徒弟という物語など、他者の作った物語を生きさせられる傾向がある。ピップは周囲の大人の自分への非難を不当だと反発しつつもそれが真実であるかのように罪悪感を抱くが、それだけでなく、たとえば上京

後、ジョーへの訪問を避けるようになるなど、大人たちが非難したとおりの忘恩に陥ったり、浪費癖で借金を膨らませるなどの芳しくない行状に陥ったりし、大人たちの非難の正当性を証明するかのようである。ピップは作品の後半でマグウィッチへの最初の嫌悪感を克服し、恩人の身の安全のために全身全霊を捧げるに至ったことを物語るが、マグウィッチの遺産は受け取らないという最初の嫌悪感の中で固めた決意を貫くなど、知らず知らずのうちに、忘恩に陥っている様子を見せる。忘恩という罪から最も遠ざかっているとピップが安心しているまさにその時、ピップが忘恩に陥っている姿を作品は描くのである。幼年期、少年期に周囲の大人たちがピップに加えた言語的な暴力の最も深刻な恐ろしさは、ピップを大人たちの決めつけたおりの芳しくない人格へと変容させてしまう不条理な力にある。ピップは作品の最後まで、大人の非難どおりになつてしまおうという悪夢のような状態から脱することができないのである。

ピップが大人たちにその性悪さを言いつのられるのは、人類の罪のすべてをピップが背負わせられているかのようで、キリストが人類の罪を引き受けて代理的に償ったことと類似している。しかし、類似とともに、ピップは死によって贖罪をするのではなく、それらの罪をずっと背負って生き続けて行くことを運命づけられているという相違もある。生き続けて行く、というピップのその運命は作品の冒頭でも印象深く描かれている。「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」は「ヨハネ伝」二二章二四節の言

葉だが、作品の冒頭、リンゴ、ナシ、オレンジなどの種子という意味の名を持つピップはまだ生きていて地面の上であり、既に死んで埋められている彼の両親と兄たちの墓を見つめているのである。発芽しないままずっと種でいるという運命の暗示はさらに続き、ピップの故郷は牛もいて乾いた土地もあるはずなのに、ピップは故郷を沼地という、麦のような種子が生育するには難しい土地としてイメージする。彼が後に移動するロンドンには種子がそこで芽生えるためにはさらに適さず、最後にたどり着いた乾燥地カイロでもピップは結婚しないまま、一人であり続ける。また、作品中にかるうじて描かれる鉢植えの植物の生育は、ニューゲイト監獄の囚人の比喻でしかない。財をなした畜産家マグウィッチはいても、種をまいて育てる農夫は現れず、現れるのは種子を商うパンブルチュックだけである。

パンブルチュックは穀物種商らしく、ピップに遺産相続の見込みができると、ピップは種子から利益を得ようとして、増資のために名義上の共同経営者になるようピップに働きかける。しかし、そうして一時的にピップに取り入りはするが、ピップに最も激しく、持続的に身体的、言語的暴力を加えるのはパンブルチュックに他ならない。マグウィッチの死後、ピップが帰郷した時、パンブルチュックはピップが没落したのは恩人への忘恩のせいだと言うが、パンブルチュック自身のつもりで言っている「恩人」をマグウィッチに置き換えれば、ピップの没落はマグウィッチの財産を受け取らなかった忘恩のせいでもある。パンブルチュックは、ピップに罪を背負わせ、しかもピッ

プがそれをずっと背負って生き続ける運命にあることを言い当てもするのである。

パンブルチュックはまた、いくらかの利得を期待してピップをサティス・ハウスに連れて行くが、その日の朝、パンブルチュックの店の引き出しを見たことをピップは次のように回想する。

そんなにも多くの小さな引き出しを店に持っているからには、彼は幸せな人に違いないと私には思えた。下の段の一つか二つをのぞき込んで、中のきつく縛られた茶色い紙包みを見た時、私は花の種や球根が、晴れた日にそれらの牢を破って外で花を咲かせることをかかって望んだことがあっただろうかと考えた。

（第八章）

何気ない一節だが、これが示唆するピップと暴力の関係と、作品が描く暴力の連鎖の編み目について次の節で見て行きたい。

第二節 「そんなにも多くの小さな引き出し」

G・ロバート・スターングは「たとえ遺産を失っても——時代のためのディケンズの寓話」の中で、ピップがパンブルチュックの店の引き出しを見たことを回想する先の一節に注目しながら、そこに「抑圧された生命のイメージ」を読み取っている(Strange 521)。スターングはパンブルチュックという「老偽善

者の精神の不毛さと彼が商う種子の生育力の対比は自然な成長と社会的形式の間の軋轢の一つの型である」とし、「その抑圧された生命のイメージはミス・ハヴィシヤムとサティス・ハウスの記述でさらに発展させられる」としている。そして彼は、「ミス・ハヴィシヤムは死」であり、ピップが彼女を贈り主と誤解する金銭も「それ自体が死であり、暗くされた部屋で朽ちつつあるその老婦人と適切に結びつけられている」(525)と考える。確かに、「きつく縛られた茶色い紙包み」に閉じ込められた種や球根は、スターングが考えるように、抑圧された生命を思わせる。ピップは、そのあまりの抑圧に、種や球根が発芽の意志すら喪失してしまっているのではないかと、思ったのである。スターングは「社会的形式」と呼んでいるが、パンブルチュックやミス・ハヴィシヤムにピップの生命に対する何らかの抑圧的な力を読み取るのは妥当であり、その抑圧は広い意味で「暴力」と捉えられるべきものでもあるだろう。

しかしながら、先の一節にある種子や球根の「牢を破って外で花を咲かせる」意志の喪失は、もつと直接的にはミス・ハヴィシヤムの暗い部屋への自発的な幽閉を想起させる。また、ピップの名の「種子」という意味を考慮すると、彼が種子たちの抑圧された様子に発芽の意志喪失を想像することは、同じように抑圧を受けた場合に、彼自身も脱出の意志を喪失しかねないことを示唆するし、引きこもるミス・ハヴィシヤムと共通するピップの自虐性をそこに見ることもできる。さらに、監禁と抑圧をここでは表す引き出しをたくさん所有していることでパンブル

チュックを幸福だと考えているのには、ピップ自身の中に監禁と抑圧への欲望が存在していることを読み取らなければならぬいかもしれない。「そんなにも多くの小さな引き出し」の一つに幽閉されている種子=ピップは、厳しく幽閉された種子の様子に脱出の意志の喪失を思う一方、そのような多くの小さな引き出しの所有者であることの幸福を想像する。被抑圧者の抑圧者への転換がそこに示唆されている可能性があると言えるだろう。

スターングは先の論文の終わり近くで、「ピップの前進プログレッションの最後の段階は、彼がその犯罪者「マグウィッチ」を愛し、人類共通の罪に彼自身が密接に関わっていることを受け入れるようになる時に到達される」としている。「前進」という言葉には、進歩、成長の意味合いが感じられるが、ピップが成長したかどうかには疑問の余地がある。また、スターングは「人類共通の罪」として「人がそこから贖い出される可能性のある、生まれながらの内在的な罪深さ」を考えていて、彼はディケンズがそれを「偽善者や抑圧者、腐敗した体制の空息させるような邪悪さ」とは区別するだろう、としている (Stange 526)。スターングの考えでは、ピップは後者の種類の邪悪さには属していないということになる。しかし、ピップ自身が偽善者、抑圧者、腐敗した体制の一部と化す可能性はないのだろうか。また、そもそも、ピップはマグウィッチを本当に愛するようになったと考えるとよいのだろうか。Q・D・リーヴィスはピップの人格を肯定的に捉える論考の中で、ピップのマグウィッチへの反感

が愛へ変化する様子を克明に跡づけているが（Leavis 380-85, 406-20）、リーヴィスのような見方だけで十分だろうか。

『大いなる遺産』について筆者は、ジュリアン・モイナハンが「主人公の罪悪感——『大いなる遺産』の場合」で指摘するオリック、ドラムルとの間の分身関係と代理的復讐の考えの補足を試みながら、ピップの象徴的なマグウィッチ殺しという解釈を提起したことがある。ピップを襲った時、オリックがコンピソンの偽筆の能力を二度も強調したにもかかわらず、ピップがウエミックからの国外脱出の決行を指示する手紙が偽筆である可能性をおそらく無意識的に無視したこと、また、第一節で触れたが、ピップが以前の反感を根深く持続させているかのよりに、マグウィッチの財産を最後まで受け取ろうとしないことなどをそこでは論拠に挙げている。最も安心している瞬間に、逃れたいものが背後に迫っているというパターンが示唆するよりに、今こそマグウィッチへの感謝の念を自分に至っていると安心してゐるピップは、そこから逃れたいと願っている忘恩に陥る。ビディーの大叔母、クララの父など、年少者を圧迫する年長者の死がひたすら望まれるパターンの繰り返しも、マグウィッチの死がピップにとって厄介払い、という意味を持ちうることを不気味に示唆している。

「恩人」と言うべき面はありながら、自分の満足ののために、所有物のようにピップをロンドン紳士に仕立て上げようとしたマグウィッチは、ピップに対し広義の暴力を加えた。しかし『大いなる遺産』はさらに、マグウィッチへの反感を克服したこと

を熱く語るピップの、人生を狂わせた者への無意識の復讐の暴力までも描く。ピップの無意識を考えない限りにおいてリーヴィスの解釈は妥当だが、ピップのマグウィッチへの「愛」は殺意とすら隣り合わせているのである。スターングはピップが人類共通の罪との密接な関わりを受け入れているとしているが、その問題では、ピップ自身が暴力に陥るといふ、スターングが考える以上に密接なピップの罪との関わりを考慮しなければならぬ。しかし、ピップが偽善者、抑圧者、腐敗した体制の一部に化す可能性についてはどうだろうか。マグウィッチへの無意識の嫌悪や復讐を自覚しないピップは偽善者とも捉えられるが、抑圧者、体制としてのピップの可能性については、ジェレミー・タンプリングの『ディケンズと暴力と近代国家——絞首台の夢』の第一章が有益な知見を与えてくれる。

タンプリングはその章「監獄に囚われて——ディケンズとフーコーと『大いなる遺産』」でまず、ディケンズが文字どおりの監獄と、隠喩的な監獄の両方に興味を持続させていたことを指摘した後、監獄、特に独居監房が隠喩的に持つ人間の個性化の作用と、馴致の対象としての「主体」の創成の作用についてのフーコーの思想を概説する。タンプリングは触れていないが、パンブルチュックの店先の「そんなに多くの小さな引き出し」は、種子や球根が一つの引き出しに一個ずつ収納されているのではないにしても、近代の大規模な監獄のイメージによく合致するものである。引き出しの中身を一方的に透視することはできないが、種子や球根を細かく分類し、収納し管理する

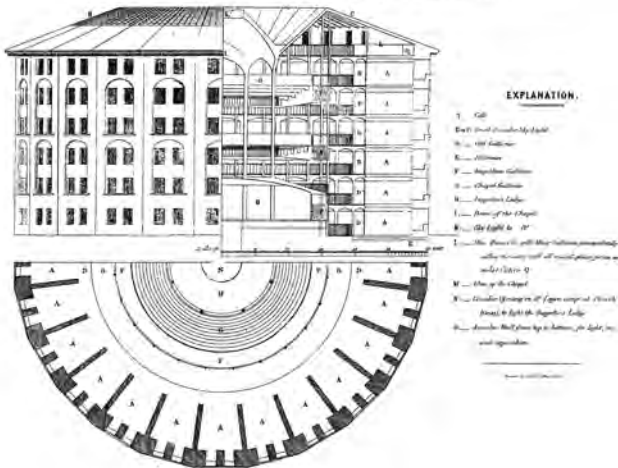
種子=ピップは牢を破って外で花を咲かせるか

その引き出しの所有者は「^{パノプティコン}一望監視施設（図版②）」の権力者を思わせもする。ピップが引き出しの中の種子と球根が脱出の希望を喪失してしまっているのではと想像するのは、パノプティコン的な社会の中に無力に閉じ込められた人間についての幼いピップの直感を表現しているようであり、逆に、その引き出しの所有者の幸福を想像するピップが志向しているかもしれない抑圧者は、一望監視施設の権力者ほどに徹底した抑圧者と捉えられる。

先に見たスターングはピップを抑圧するものを「社会的形式」や「腐敗した体制」と表現しているが、タンブリングはそれとは違い、「一望監視施設が囚人に対して及ぼす作用が隠喩的に当てはまるような近代社会の権力の関係の編み目の中に、ピップを位置させている。タンブリングが特に注目するのは、そうした権力の関係の連鎖の中で、被抑圧者が抑圧者の言語を内在化させてしまうことである。抑圧者の言語の内在化とは、たとえば、子供時代、パンブルチュックたちの言語によって「罪人」と規定されていたピップが、人を罪人視する言語を内在化させてしまい、第五六章の終わりで、「おお、主よ、罪人である彼に哀れみを！」という言葉が死んだマグウィッチの傍らで言う最もふさわしい言葉だとしていることを、タンブリングは実例として挙げている。本来罪人であるのはピップであるかもしれないのに、ピップはマグウィッチを罪人と規定するのである。

タンブリングはまたそうした被抑圧者の抑圧者への転化を、マグウィッチとピップの関係を例として挙げて説明してもい

A General Idea of a PENITENTIARY PANOPTICON in an Improved, but not in its (See P. 137) Original State. In Dombey's Righteous to Plan, Execution, & Success (Being Plans referred to in, p. 137).



図版②「パノプティコン」

ジェレミー・ベンサムが考案した中心の監視塔からすべての独房を監視できる監獄。個人への完全な支配の形として注目される。

る。マグウィッチは除け者、服従者として体制によって周辺化されていたが、富を手にした後は、自らを中心化させようとするかのように、被造物としてピップをロンドン紳士に作り上げる。これ自体が広い意味での被抑圧者の抑圧者への転化の例だが、さらに、タンプリングは、ピップが第五九章で小ピップを「与えるか、貸すか」してかれるようビディーに頼む一節に着目する。マグウィッチにされたのと同じ、擬似的な養子化と作り上げを、ピップがジョーとビディーの子供にしようとしていると解釈できるからである。ピップが小ピップを譲り受けるという話はビディーが穏やかに受け流して実現しないが、実現している例として、ピップのハーバートに対する援助が、ピップによる他者の作り上げと考えることができるだろう。ハーバートに初めて会った時、ピップのハーバート援助の計画を知らないだろうマグウィッチが「誓つて、ピップがあんたを紳士するでしょう」（第四〇章）と言つのも、紳士にされたピップが今度はハーバートを紳士にするのが当然だとマグウィッチは考えているかのようである。コンピソンの手下で犯罪の代行者だったマグウィッチがピップを手下にして食料の窃盗を代行させたこと、また、そうするようピップを脅した時、ピップが背くと彼を食べべてしまう若者を手下として持つていると言つことなど、権力の関係の反復の例はタンプリングが指摘していないものを作中からさらにいくつか拾うことができる。

『大いなる遺産』は全編がピップの一人称の語りだが、彼が特に理由もなく「自伝」を書いていけることにも、タンプリング

は権力の作用を見ている。体制にとつて自伝を人間に書かせることは、体制の言語を内在化させる最適の手段で、それを自発的に行うほどピップは体制に取り込まれているのだとタンプリングは考える。彼はまた暴力的な抑圧を受けた人物がその抑圧を暴力によって発散することも広い意味での体制の内在化と捉えていて、ピップ、マグウィッチの他、自分が受けた暴力を自他に向けるミス・ハヴィンシャム、エステラなどを取り上げながら、作品中の「暴力」を詳細に考察する。

こうしたタンプリングの『大いなる遺産』の解釈は暗澹としていて、本稿の問い「種子」ピップは牢を破つて外で花を咲かせるか」をもし投げかけるなら、この節で見えてきたことから分かるように、それへの答えは端的に否である。タンプリングの解釈のモデルでは、ピップはパノプティコン的な社会の権力関係の編み目に脱出不可能なまてにからめ取られていることになる。ピップのマグウィッチへの無意識の復讐を想定するにしても、それもまた、ピップ自身が受けた暴力的な抑圧への、同じ性質の力での反逆に他ならない。しかし、タンプリングが見るような、この作品の描く巨大な監獄に崩壊の兆しはないだろうか。

第三節 取り壊されたサティス・ハウス

ディケンズは『大いなる遺産』を、ピップがジョーとビディーの息子とロンドンを歩いている時にエステラが馬車で通りかか

り、小ピップをピップの息子と勘違いする、という場面で締めくくっていたのを、ピップとエステラの幸福な結婚を期待する読者を裏切るべきではないというブルワーリットンの意見を取り入れて、現行の結末に変更した。

この変更は、作品でそれまでに描かれてきた、ピップが避けたいと思うものにずっとつきまとわれる、という主題との整合性の観点からだけ見れば、改悪とも考えられる。最初の結末の方が、ピップの復讐の能力の一貫した表れを描いているからである。ピップは第一節で見たタール入りのブランデー、ハーバートとの格闘などの例をはじめとして不可思議な復讐の能力を帯びていて、その能力は、分身のオーリックを通して姉の殴打として、また、ドレスに火のついたミス・ハヴィシヤムを助けようとする際の敵同士のようなとっくみあいとして、発揮されてきた。姉とミス・ハヴィシヤムが最後にピップに救いを請うという設定になっているのも、そうした象徴的な復讐の成就を強調している。エステラに対しても、分身のドラムルが彼女を虐げることによって象徴的な復讐がなされていて、エステラはかつて振り捨てたピップの愛の貴重さを悟り、復讐された者に相応しく悔悟する。最初の結末では、エステラも医師と結婚しているが、ピップが他の女性と結婚し息子も生まれて幸福に暮らしているのと彼女が勘違いするのは、悔悟したエステラに対して、幸福に恵まれた者としてピップをより上位に立たせる。ピップは小ピップを抱き上げるエステラの表情に「苦しみかミス・ハヴィシヤムの教えより強く、私の心がかつてどのようであった

かを理解する心をエステラに与えた」ことを確信する。ピップは不可思議なほど自分の復讐の能力に罪悪感を抱くが、恩人と感じるに至ったと認識するマグウィッチに対してすら知らず知らずのうちに人生を狂わせたことへの復讐をする。ピップが逃れたいと願う復讐の能力は持続し、作品の最後でもピップは、エステラがドラムルに苦しめられて悔悟するに至ったことを見て取るのである。

変更された結末では「苦しみは他のすべての教えより強く、あなたの心がかつてどのようであったかを理解するよう私に教えた」とエステラは言い、表情だけの最初の案よりはつきり言葉で悔悟の気持ちを示すが、その結末でピップは復讐をエステラに求める懇願者の立場に立っていて、復讐者としての優位さは影を潜めている。しかし、新しい結末へのこの変更は、へ避けたいもの（まといつき）という作品の主題の一つを犠牲にした、単なる読者への迎合ではなく、ディケンズが作品にへ暴力の連鎖からの解放」という新たな主題を付け加えようとしたものと考えることもできるだろう。外部から加えられた暴力にピップが意図せず、容易に復讐できってしまうことは、暴力の連鎖の重要な要素である。ピップのその復讐の能力が消滅するようには作品の結末を変更することで、ディケンズは作品をピップが絶望的に暴力の編み目からめ取られている様子を描くものから、その編み目からの解放の希望を示唆するものへと変化したのだと考えることができるのである。

暴力の編み目の消滅への希望は、新たな結末において、ミス・

ハヴィンシャムが自分自身を幽閉していたサティス・ハウスが取り壊されていること（図版③）でも示唆されているだろう。結婚式当日に屈辱を嘗めさせられるという外部からの広い意味での暴力をミス・ハヴィンシャムは内面化して、エステラを復讐の道具に作り上げるといふ暴力や、エステラを通して男性一般に復讐するといふ暴力、自分自身を日の当たらない部屋へ閉じ込めるといふ暴力を生じさせているが、ミス・ハヴィンシャムが死に、牢獄として機能していたサティス・ハウスの建物が消滅した更地が結末の場面とされ、ピップの復讐の能力も消滅した様子が描かれるのは、「絶望」から「希望」への、作品の大きな変化を示しているだろう。作品の結末の変更は、ピップとエステラが将来結婚する可能性が生じるようにされたといふにとどまらない、作品のもっと本質的な方向の転換を伴っているのである。

ピップがエステラと再び関わりを持ち始めることは、自己への暴力のようなかつての執着の復活にはならないようである。リーヴィスはピップが、宝石とかつてのさまざまな魅惑を失ったエステラと結婚するだろうことを、ピップがサティス・ハウスにかけられた呪縛から解放されていることの表れと見ている（Learns 330）。しかし、ディケンズは唐突に結末を希望の方向へ転換させただけなのだろうか。ピップ自身はマグウィッチへの反感を克服し、ある種の成長を遂げたという意識を持ちながら語りをしている一方で、作品はピップに影の部分や暴力の編み目が絶望的につきまとい、離れないことを描いてきている。



図版③「私たちは近くのベンチに座った」（第59章、F・A・フレイザーの挿絵、ハウスホールド版）

ピップとエステラは、ミス・ハヴィンシャムが自らを閉じ込めていたサティス・ハウスの建物が取り壊されている場所で再会する。

しかし、そうでありながらも、絶望と拮抗する希望の要素が作品中に描かれてはいないだろうか。最初の結末では、絶望の基調で作品を完結させることをディケンズは選択したものの、希望の要素を既に作品中に描いてもいたからこそ、第二の案では作品の結末を希望の方向へ転換したということはないだろうか。その点を、「打つ」という行為が暴力と広く結びつけられながら、ジョーの鍛冶仕事では建設的な営みとなっていること、ミセス・ジョー殴打事件の日に二人の脱獄囚の一人が捕まらずに逃亡し続けていたことを手がかりに、次節で考えてみたい。

第四節 打つことの暴力と建設、逃げ続ける一人の囚人

『大いなる遺産』において、「打つ」という行為や動作は暴力と広く結びつけられている。マグウィッチは囚人船でやつと機会を得てコンピソンの背後に近づき打ちかかろうとしたところを捕らえられ、閉じ込められた船倉から脱出して沼地でピップに出会っている。ミス・ハヴィシヤムはピップたちが鍛冶の作業の時に歌う「クレム様」が気に入って、部屋をピップ、エステラとぐるぐる回りながら口ずさむが、歌詞の中の「打て」という言葉は、ミス・ハヴィシヤムの復讐の衝動の象徴のように何度も繰り返される。オーリックはミセス・ジョーを背後から打ち倒し、後にはピップを打って殺そうとする(図版④)。鍛冶仕事のハンマーで打つ仕事も、職への不満や何者かへの恨みを込めながら行えば、暴力への衝動と重なる動作となりうる。



図版④ 『『お前、これを知ってるか?』と彼は言った』(第53章、F・A・フレイザーの挿絵、ハウスホールド版)
オーリックはコンピソンの偽筆の能力について二度も言及するが、ピップはウェミックの脱出決行指示の手紙(偽筆でないかと後で判明する)が偽筆である可能性に思い至らない。

しかし、「打つ」という行為や動作がそのように作品中で広く暴力と結びつけられているからこそ、ジョーの鍛冶の仕事が建設的な営みであることは大きな意味を持つてくる。「打つ」という破壊的な暴力にもなる行為は、有用な物を生み出すという建設的な営みにもなるからである。ジョーは階級的な上昇欲や金銭欲の対極にある無欲さや人間の尊厳を体現しているが、それだけでなく、暴力の蔓延と連鎖の中で、暴力と共通する運動のエネルギーが建設的なものを生み出す営みを一人体現しているのである。確かに、ジョーは父が母に暴力を振るう姿を目の当たりにした精神的外傷から女性の暴力に対抗できずピップの姉に虐げられる立場にいる。ジョーは彼自身も暴力の編み目の中におり、ピップを姉の暴力から守ることもできない。ミス・ハヴィシヤムに面会した後ジョーは、彼もサティス・ハウスの呪縛に一時的にかかったかのように、ミス・ハヴィシヤムがミセス・ジョーのために金銭を与えたと、いつになく易々と嘘をつく。ジョーがそのような嘘をついたことは、ピップがサティス・ハウスを初めて訪れた後に姉とパンブルチュックに易々と嘘をついたことと奇妙な共通性がある。ピップのようにサティス・ハウスの暴力的な影響に捕らえられ続けることはないが、ジョーもサティス・ハウスの及ぼす力からまったく無縁ではなかった。また、ジョーの職業がロンドンでの経歴を経た後のピップが本来選ぶべきものとして描かれているのでもないと考えられる。しかし、そのようにジョー自身が暴力の編み目にさまざまな都合いであらめ取られているとしても、また、彼

の職業がピップの帰るべきものではないとしても、ジョーは無欲な人格によってだけでなく、その鍛冶屋という職業によっても、暴力と対極にある建設的な、希望につながるものを作品の片隅で体現しているのである。⁷

もつとも、ジョーの仕事は脱獄囚にはめるための手錠を修理するという、監禁に寄与するものとなる時もあり、「打つ」ことが破壊と建設との二面性を持つと同様、「打つ」ことの建設的な側面自体の暴力との関係も二重的である。最初は希望への出口の見えない結末を構想していただけあって、ディケンズの希望の要素の描き方は、あくまでも負の側面を伴う二重性を帯びている。そうした二重性は、一人は捕らえられ、一人は逃亡を続けている、ミセス・ジョー殴打の日の二人の脱獄囚のピソードにも表れている。

その二人の脱獄囚のエピソードは、直接的には、姉の事件についての、ピップの罪悪感を増幅させる働きを持っている。マグウィッチの切り離れた足かせが姉の襲撃に使われたらしいことでピップは理屈に合わない罪悪感にさいなまれるのだが、「二人の脱獄囚」はピップの幼児期のマグウィッチとコンピソンの記憶をよりまざまざとよみがえらせるからである。また、一人の脱獄囚が捕らえられていないことは、身近に囚人が潜んでいるかもしれないという漠然とした恐怖を感じさせるものでもあるだろう。しかし、そのように直接的にはピップに暴力とのつながりをより強く意識させるものでありながら、ミセス・ジョー殴打の日の二人の脱獄囚は、かつてのマグウィッチとコ

ンピソンとの相違によって、希望につながる要素を表現する。マグウィッチはピップのおかげで得たヤスリによって足かせを切り離し、逃げおおせる可能性が増したところで、コンピソンへの復讐心に駆られて解放の可能性をふいにする。復讐心という暴力の連鎖の核心的なものの故にかつての二人の囚人は二人とも捕らえられるに至るのである。それと対照的に、ミセス・ジョーの事件の日の脱獄囚は、一人は捕らえられても、一人は逃げ続け、作品中でその捕縛が言及されることはない。一人は捕らえられ一人は逃げおおせるといふ二重性を伴いながらではあるが、この二度目の二人組の脱獄囚は解放という希望の要素になっている。

ミセス・ジョーの殴打にピップはもちろん関わっていないが、象徴的には、分身のオーリックが代理として復讐を果たしている、この事件でピップはオーリックと分身の絆で強く結びつけられることになる。同じように分身同士の関係を想起させる二人の脱獄囚は、一人は捕らえられ一人は逃げ続けて離ればなれになり、分身関係が解消されるかのようである。二重的なものへの奇妙なこだわりと言わなければならない。ピップが分身の絆に縛られることが描かれる時、それと対照的な、分身の絆からの解放を表すものがその近くに描き込まれるのである。

しかし、そうした希望の要素はありながら、作品が暗澹としたものであることは否定しがたい。作品は監禁や束縛から逃れ去る囚人を描く一方で、自分が受けた苦しみでこだわって自らを幽閉するミス・ハヴィシヤム、その養母の教えを自虐的に身

にしみこませ不幸な結婚をするエステラ、彼女への拷問のような思慕から自身を解放することのできないピップなどを描く。それらの人物が自分自身を苦しめてしまうのは、タンプリングが考えるような、外部からの暴力の内面化の故であり、マグウィッチが復讐の執念からピップを紳士に作り上げようとしたのも、コンピソンらへの恨みにこだわったためで、外部からの暴力の内面化が根本にあると言える。

マグウィッチは作品の冒頭近くでピップに食料とヤスリを持ってくるよう命じる時、子供の内臓を食べたがる若い手下がいて「子供が戸に鍵をかけて、ベッドで暖かくして、くるまって頭まで布団をかぶって気持ちよくて安全だと思っても、その若者はそっと、そっと子供へ這い寄ってきて、子供の腹を引き裂くのさ」(第一章)と脅す。安心だと思っている時にも襲ってくるその若者に似て、犯罪者との関わりや復讐の能力、忘恩の傾向などピップが避けたいと願うものが、ピップが最も安心しきっている時に彼に接近している様子を作品は何度も描く。マグウィッチによって暴力的に結ばされた絆、大人の言葉の暴力によって背負わされた特質からピップは逃れられない。

先に見たとおり、サティス・ハウスを初めて訪れる直前、ピップはパンブルチュックの店の引き出しの「花の種や球根が、晴れた日にそれらの牢を破って外で花を咲かせることをかつて望んだことがあっただろうか」と思うが、そのピップ自身がその日のうちにエステラへの思慕の牢に閉じ込められることになる。ピップはまた、種を閉じ込める引き出しの所有者の幸せを

思うなど、監禁への欲望を垣間見せたりもする。

そのように作品は、人々が暴力から解放されることの絶望的な困難さを何重にも描く。しかし、そうした絶望的な様相と組み合わされた二重性とともにではあるが、サティス・ハウスの消滅、「打つ」という行為の建設的な側面、逃げ続ける一人の脱獄囚などによって、作品は暴力からの人々の解放の希望、種子Ⅱピップが牢を破って外で花を咲かせる可能性を示唆しているのである。

注

1 ピップの兄たちのうち、トバイアスとロジャーは決定稿以前に変更があり、それについてはエドガー・ローゼンバークがノート版のテキストに付した『大いなる遺産』の執筆（E. Rosenberg 439）を参照のこと。ピップの兄や姉夫婦の名については、拙論「チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』における主人公の自己と罪」も参照されたい（鶴飼三四五〜四六、三四八）。

2 カート・ハートグは「ミス・ハヴィシヤムの陵辱」の中で、妻に虐げられるジョーの姿を目の当たりにすることがピップの中にマゾヒスティックな性向を作り出すなど、年長者の暴力をめぐる関係の幼い者への影響を指摘してゐる（Hartog 248-55）。

3 ディケンズのカニバリズムという暴力へのこだわりについてはハリー・ストーン『ディケンズの夜の側面』を参照のこと（Stone

125-36）。

4 作品中の暴力のより網羅的な事例を見るためには宮崎孝一氏の『大いなる遺産』における暴力」を参照のこと。宮崎氏の考察には、「幼いとき大人から言われた言葉が人間の行為の方向を決める」（宮崎三八）など、ピップが幼年期に受ける言語的暴力の長期的な影響の指摘もある。

5 ピップに自分自身の人生の筋書きや物語を決定する作者としての能力が欠如しているという問題については、ピーター・ブルックスの「反復、抑圧、再来——『大いなる遺産』の計略」（Brooks 133-42）、および、原英一氏の『大いなる遺産』における物語の不在と不在の物語（Hara 593-614）を参照のこと。ブルックスは「結末において私たちは、筋書きの後まで生き延びた生、筋書きを放棄した生、筋書きという病弊を取り除かれた生——残余の生——の印象を受ける」（Brooks 138）、原氏は「単一の、あるいは複数の物語は崩壊して不在となり、この不在によって作り出された真空の中にピップを置き去りにする」（Hara 595）とし、ピップが外部から課される筋書きや物語が作品の途中で消滅するという見方に立っている。

6 ロビン・ギルモアは「ディケンズと大いなる遺産」の中で、鍛冶屋の職に就くことをいやがることでピップを「俗物」と見るのは過酷すぎることを、進歩・前進や自助という当時の思潮の観点から指摘してゐる（Gilmore 105-09）。また、リーヴィスはピップがビディーと結婚して鍛冶屋になる選択肢に対し否定的な見方をしてゐる（Leavis 325-28）。

種子=ピップは牢を破って外で花を咲かせるか

7 シフラ・ホッチバーグは、ナサニエル・ホーソーン
の短篇「イーサン・ブランド」の『大いなる遺産』への影
響を指摘する論考の中で、「イーサン・ブランド」で地獄の
火を象徴している石灰釜の火が、『大いなる遺産』ではピッ
プの子供時代の純真さの場であるジョーの鍛冶場の炉の火
と、更生の火の洗礼であるオーリックがピップの死体を焼く
つもりだった石灰釜の火とに二分化されていると捉えている
(Hochberg 120-21)。石灰釜が「道徳的更生の可能性も象徴
する」というホッチバーグの解釈は、水門小屋の事件でピッ
プが一層強くオーリックに結びつけられる点(ピップはコン
ピソンの偽筆の能力を言われながらオーリックの共犯者のよ
うに、それに適切に反応できない)を考慮していないが、地
獄の火としての石灰釜の火の『大いなる遺産』への影響の指
摘は、ジョーの鍛冶場の炉の金属を加工し有用な物を生み出
す助けになる火が、他の場では破壊と劫罰としての火にもな
る二重の性質を際立たせる。